

# 一番割遺跡平成13年度発掘調査概報

—黄檗山手線建設工事に伴う発掘調査—



2002

宇治市教育委員会

## 例 言

1. 本書は、宇治市教育委員会が宇治市五ヶ庄二番割1-3番地で実施した、一番割遺跡発掘調査の概要を取りまとめたものである。
2. 本発掘調査は、宇治市（担当課：建設部道路課）が計画した街路築造工事（黄檗山手線）に伴い、文化財保護法の規定に基づいて実施したものである。
3. 本発掘調査に要する費用については宇治市が負担した。
4. 発掘調査は平成13年11月15日に着手し、平成13年12月27日に終了した。発掘調査の面積合計は100㎡である。
5. 本発掘調査は下記の体制で実施した。  
発掘調査責任者：宇治市教育委員会 教育長 谷口道夫  
発掘調査担当者：宇治市歴史資料館 文化財保護係 主任 杉本 宏  
発掘調査事務局：宇治市歴史資料館
6. 本発掘調査の実施にあたっては下記の方々のご協力をえた。感謝する。  
宇治少年院、宇治少年院官舎自治会 以上。（順不同、敬称略）
7. 本発掘調査の関係資料と採集品については、宇治市歴史資料館が保管している。
8. 本書の編集は宇治市歴史資料館が行い、実務を杉本が担当した。

## 序

一番割遺跡は、黄檗山萬福寺の南方の丘陵裾部に展開する遺跡です。萬福寺の裏山からこの辺りにかけては、古くに馬具や土器等が出土したと伝え、古墳の存在が想定されています。

またこの場所は、明治5年に萬福寺の塔頭の一部を上地するなかで陸軍省の火薬庫が設けられたところでもあります。明治27年に、現在の陸上自衛隊関西補給処の場所に火薬製造所が設置された以降は、火薬庫も規模を拡大し昭和20年の終戦を迎えています。

さて、この度の発掘調査は、主要地方道京都宇治線の交通渋滞緩和を目指して宇治市が計画する、黄檗山手線敷設工事に伴って実施したものです。昨年度に引き続いて2回目の発掘調査であり、昨年度調査地の東側が今回の対象地です。

発掘調査の成果については本書に報告するように、明治期に建設された火薬庫関係の土地改変によって、遺跡が所在したはずの地形が完全に變形していることを確認するという結果となりました。

末筆となりましたが、本発掘調査の実施にあたって全面的なご協力を賜った宇治少年院及び宇治少年院官舎自治会をはじめ、関係各位には心よりお礼を申し上げます。

平成14年3月

宇治市教育委員会  
教育長 谷口道夫

# I はじめに

本書は、文化財保護法第57条の3第1項の規定により平成13年9月19日付で宇治市長より通知のあった黄檗山手線街路築造工事に伴って実施した、宇治市五ヶ庄二番割1-3番地所在の一番割遺跡発掘調査の概要を報告するものである。発掘調査の実施は、宇治市からの依頼に基づき宇治市教育委員会が主体となり、宇治市歴史資料館が担当した。

一番割遺跡は、宇治市五ヶ庄一番割から二番割にかけての新田川沿いに所在し、須恵器や中世陶器の破片が採集されたことにより、昭和60年の『宇治市遺跡地図(改訂版)』に記載された遺跡である。遺跡の具体的内容は不明であり、いわゆる遺物散布地という評価が適切となる。萬福寺の裏山からこの辺りには、江戸期に土器や馬具など古墳遺物の出土や大石の存在が伝えられる事から、あるいはこのようなものと関係する可能性が考えられてきた。

発掘調査は平成12年度において、同じく黄檗山手線街路築造工事に伴って五ヶ庄二番割5-3番地、すなわち新田川と小新田川の合流点より西側で実施しており、今回はそれに引き続き予定路線延長部での調査となる。昨年度の発掘調査では、古墳時代に所属する須恵器片の出土が少量は見られたものの、近代以降の土地改変が顕著であり遺構は確認されていない。

今回の調査地点は合流点より西側となり、宇治少年院敷地にあたる。発掘調査の実施にさいしては、宇治少年院及び宇治少年院官舎自治会から全面的なご協力をいただいた。感謝する。



fig 1. 調査地位置図 (1:10,000)

## II 発掘調査の概要

### A. 調査地の状況

今年度の調査地は、新田川の東側部分の宇治少年院敷地内にあたる。調査前の状況は、西に向かって低くなる段畑であり少年院の実習農場として使用されていた。実習農場として利用される前は木造の官舎が建てられていた。現地の標高は57～61m程である。

### B. 調査の経過

発掘調査にあたっては、予定地が少年院敷地内であるため、宇治市道路課、歴史資料館、発掘作業委託業者（文化財京都）、宇治少年院の四者による協議を11月15日に行い、調査地の遮蔽や構内入退出の方法、禁止事項などを取り決めた。その後準備作業を行い、農場が予定地からの移転を完了した12月4日に現地発掘を開始し、12月27日に埋め戻しを行い発掘作業を終了した。

### C. 調査地の状況

トレンチの配置計画は、当初は予定路線にそって東西にa・bの2か所のトレンチを計画したが、西側のaトレンチの掘削が進むにつれ、当該地の地形は近代以降に大きく改変を受け、旧地形が変形していることが判明したため、予定したbトレンチをb～dのグリッド状トレンチに分割し、その変形度合いを確かめることとした。各トレンチの状況は以下のとおりである。

また、掘削にあたっては、耕作土の下部に旧陸軍の鉄カブト等の遺品が存在する旨の情報があったことを踏まえ、もっぱら人力で土砂排除を行うこととした。

**a トレンチ**：予定地の西端に設定したもので、東西13m、南北4mの規模である。厚さ20cmの耕作土を排除するとコンクリートや瓦片を混じえた置土が40cmあり、その下に赤褐色混礫の地山が存在した。地山上での遺構痕跡はない。西端と北辺中央辺りに現代の塵芥投棄土壌が存在した。西端のものはトレンチ幅より大きく、断割りで深さ50cmほどが確認できたため、この塵芥処理穴の掘削を止めた。北辺の土壌にはコンクリート基礎片が投棄されており、旧官舎撤去時のものと判断できた。ここから「陸軍省所轄地」石柱を採集した。

**b トレンチ**：東西3m、南北5mの規模である。土層は厚さ20cmの耕作土を排除すると、鉄線片・ガラス片・コンクリート片・レンガ片ほか諸種の塵芥を混じえた現代の客土が一面に検出された。このため、客土層の厚さ確認のため、南端部で段掘り状に断割りを行ったところ、下層ほどコンクリート片・レンガ片を多量に含みながら、地表下150cmまで続くことが理解された。したがって、現代の塵芥投棄土壌によりこの付近全体の地形が消失していることが推測されたため、これ以上の掘削を止めることとした。

**c トレンチ**：東西3m、南北5mの規模である。このトレンチの東端でbトレンチより続くと思われる現代の塵芥投棄土壌の東端を検出した。ここから火縄銃の機関部品が出土した。

**d トレンチ**：東西3m、南北5mの規模である。土層は厚さ20cmの耕作土を排除すると地山が確認でき、最近の耕作に伴うと判断できる溝や柱状の跡が数か所検出できた。

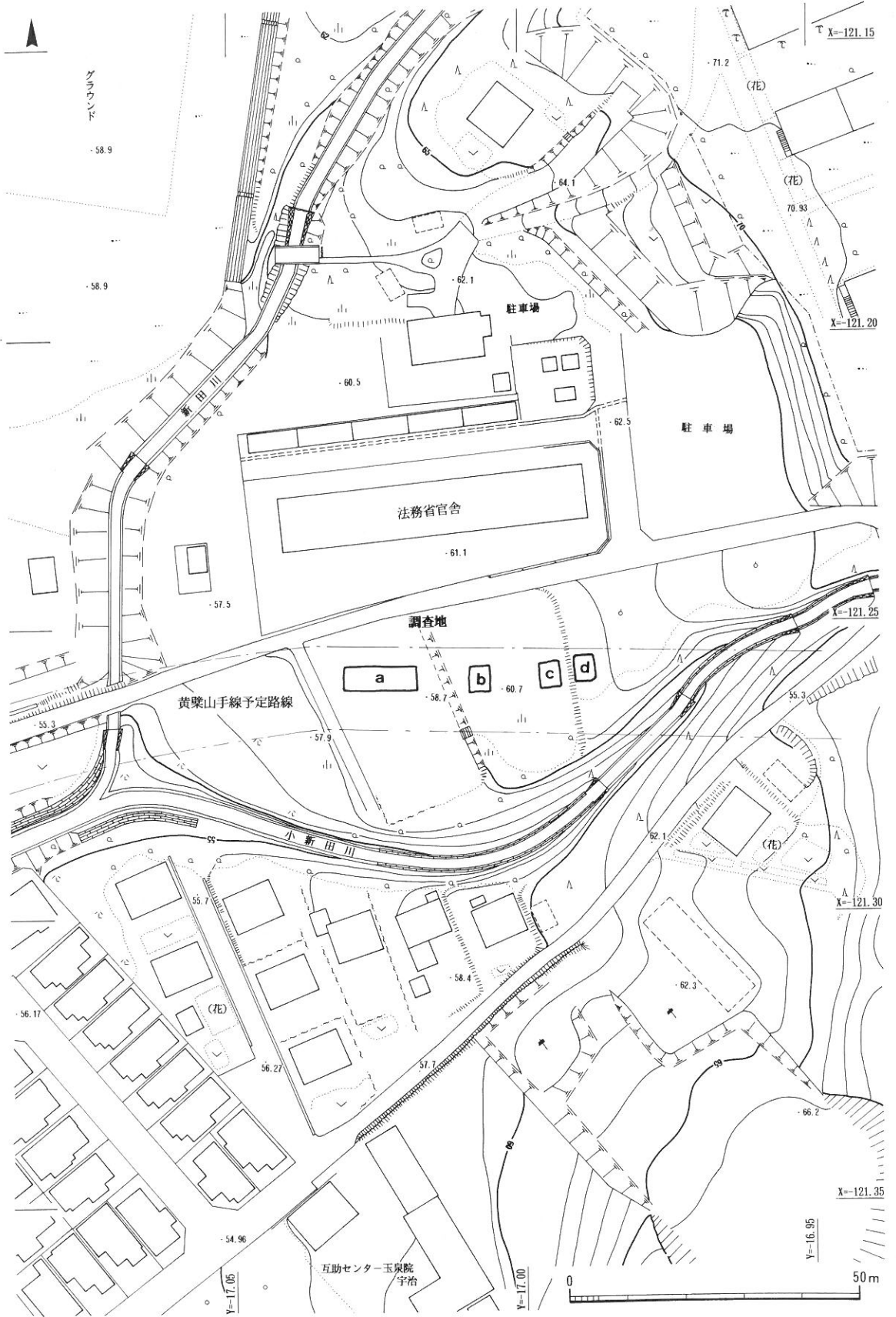


fig 2. トレンチ配置図



fig 3. 調査地の遠景 (西→東)



fig 4. 掘削前の調査地 (東→西)



fig 5. 調査中の全景 (西→東)



fig 6. 掘削終了の全景（西→東）



fig 7. a トレンチ全景（東→西）



fig 8. 調査地東部の全景（西→東）



fig 9. b トレンチ全景 (南→北)

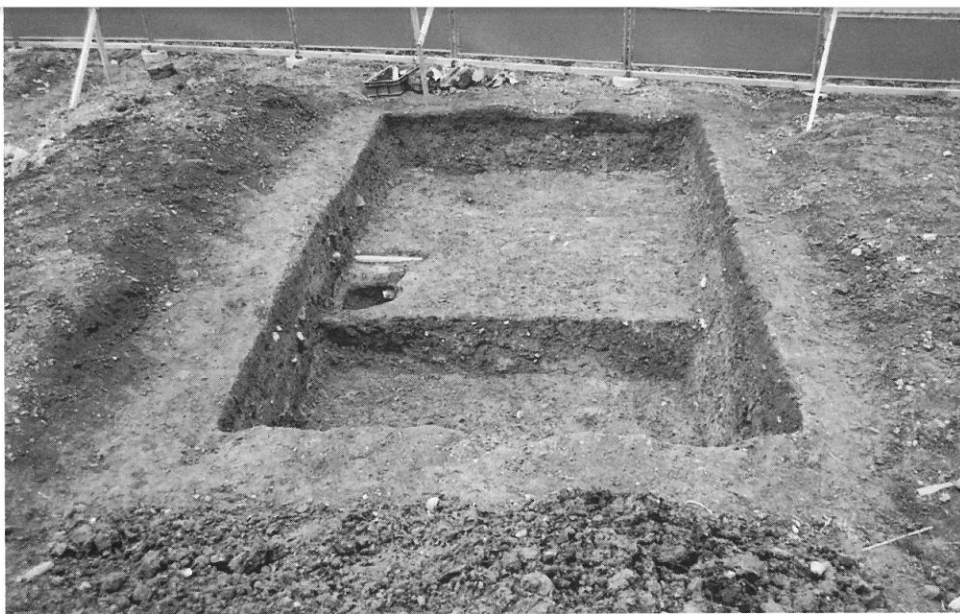


fig10. c トレンチ全景 (南→北)

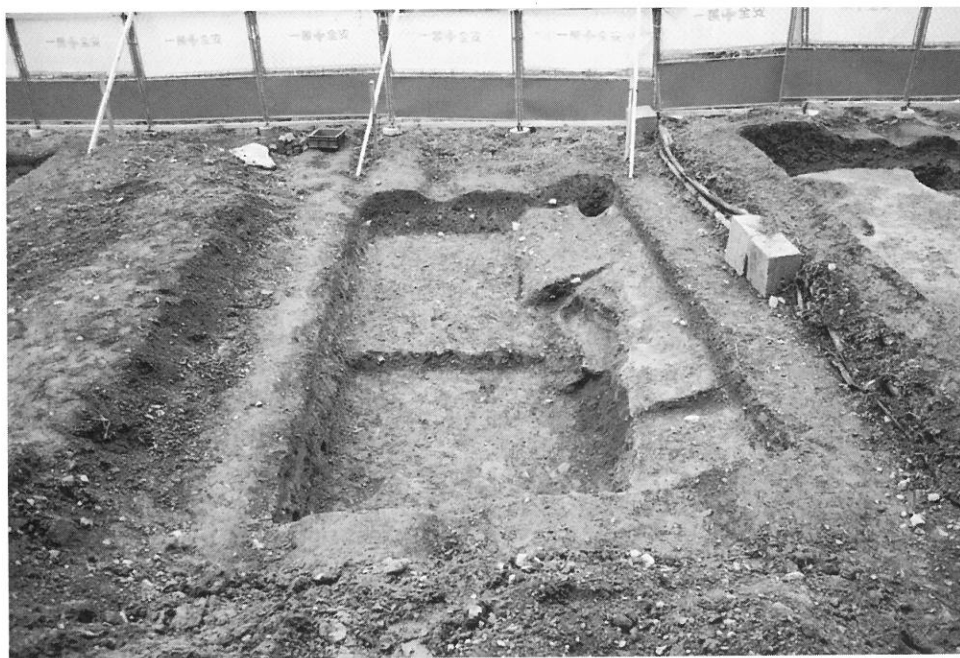


fig11. d トレンチ全景 (南→北)



### Ⅲ 採集品の概要

前述したように、本発掘調査においては、当該地が近代以降の建築廃材などの廃棄目的による塵芥投棄土壌が大規模に複数回掘削され、当初目的の遺跡自体が地形と共に消失しており、関係遺物を含め検出できなかった。なお、当該地は明治期に設置された陸軍宇治火薬庫の南端部にあたり、塵芥投棄土壌はこれら弾薬庫諸施設の戦後の解体、一部は少年院旧官舎に関係すると判断できた。ここから旧火薬庫関係で特徴的なものを採集したので、以下に報告する。

**火縄銃部品 (fig12)** 長さ11cmほどの「く」字形の銅製品であり、1点を収集。火縄銃の機関部の一部である「火ばさみ (火縄挟)」である。火縄を装着し火皿に打ち付ける、いわゆる撃鉄にあたる。屈曲部に開けられた穴が支点となる。歪みや変形は特に認められない。

火縄銃の機関部 (カラクリ) については、火ばさみを落とす弾金 (毛抜金) が外にある「外カラクリ」と内部に納めた「内カラクリ」との別がある。本品を観察すると、左端部の下に段差が設けられており、弾金のあたりに対応する工夫がみられることから、外カラクリを持つ火縄銃に使用された部品であったと判断できる。

**乾電池底部 (fig13)** 乾電池の底部と考えられる直径4cm弱の銅製円盤を5個体採集した。本体部は厚紙を銅板で被覆したもののようで、内部には円形積層状の炭化物が認められる。底部中央には円形の孔があり、同部内側は突出している。底部周囲には刻みを持つものと持たないものがあり、前者には「緑星」と「赤星」、後者には「黄龍」の刻印が認められる。

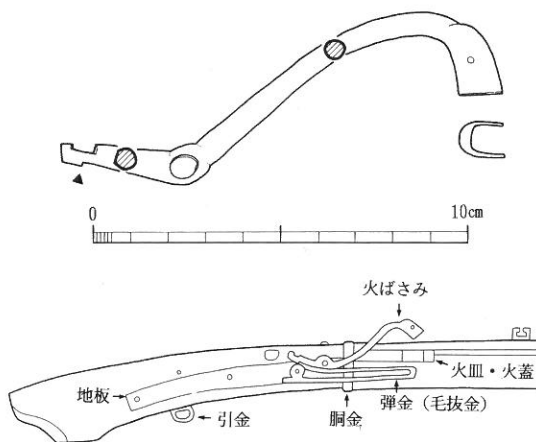


fig12. 採集部品と火縄銃の部分名称



fig13. 採集乾電池の底部拓本

**レンガ (fig14: 1~4)** レンガについては、塵芥投棄土壌からかなりの量が見つまっている。大半はコンクリートモルタルが付着し破損した破片であり、レンガ構築物の廃材であることを窺わせる。この中から全形が残るものを5点採集した。大きさは長さ20cm、幅9.5cm、厚さ5.5cm程度であり、日本工業規格寸法より若干短い。また、1・2は半面が黒灰色に変色し、焼け歪みが大きいのに対して、3・4は赤褐色を呈し歪みはない。

**石柱 (fig14: 5)** 長さ85cmほど、幅18cmほど、厚み14cmほどの花崗岩製の石柱で、表面に「陸軍省所轄地」と刻まれている。刻みは浅く判読しづらい。「所」はくずし字となっている。文字面は平滑だが、他面はあら割りを残す。石柱頂部に赤ペンキが認められるため、近年まで土地境界標として使われていたものと思われる。下部は欠損。

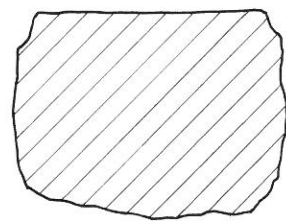
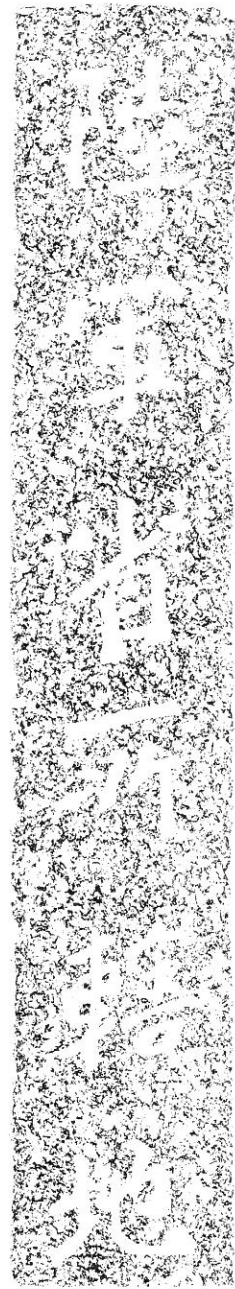
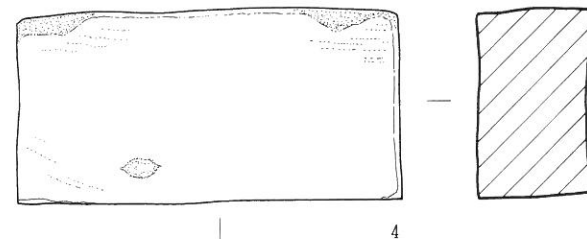
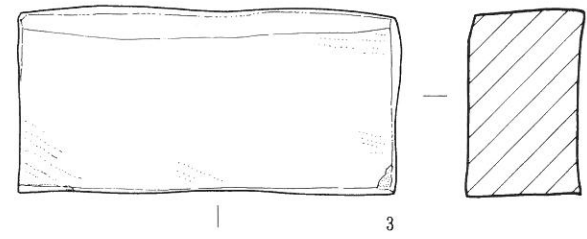
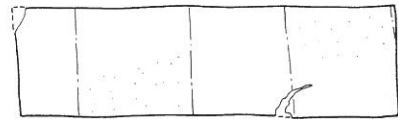
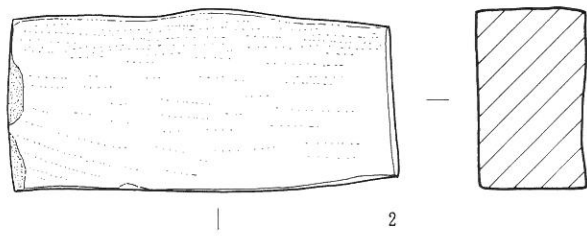
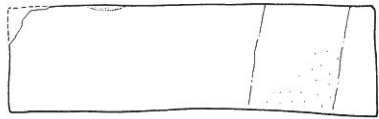
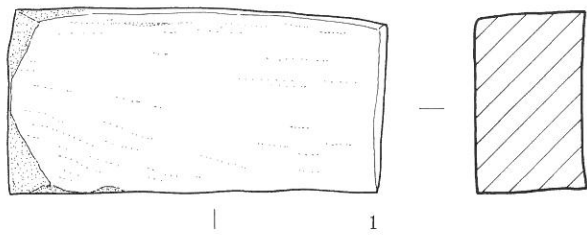


fig14. 採集レンガ・陸軍省所轄地銘石柱実測図



fig15. 採集火繩銃部品写真



fig16. 採集レンガ写真

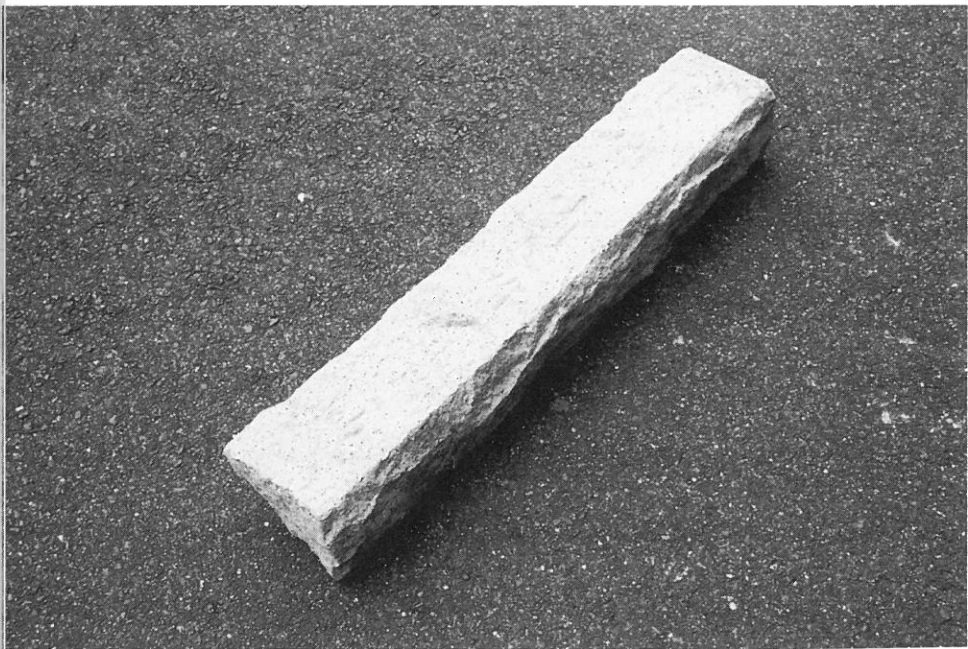


fig17. 採集陸軍省所轄地銘石柱

## IV ま と め

### A. 一番割遺跡について

一番割遺跡は、かつて黄檗山萬福寺の背後丘陵に複数の古墳が存在した伝承と、当該地範囲から土器破片が採集されたことを踏まえて遺跡と考えられてきたものであり、特に今回まで未発掘のまま具体的な内容は不明であった。

今年度の発掘調査成果と昨年度の成果を総合すると、昨年度の調査において古墳時代の須恵器破片が出土しており、古墳あるいはそれに関係する遺跡の存在は首肯されるものの、当該地は明治期に設置された陸軍火薬庫とその廃絶に伴う整地等によって大きく地形が変形しており、実態としての一番割遺跡は、この土地改変によって既に消滅しているという評価が妥当と考えられるものとなった。土器等が、近代の客土層に混入して出土する状況は、かかる反映であろう。

### B. 陸軍火薬庫について

五ヶ庄には明治5年に萬福寺の後山を利用して陸軍火薬庫が設置され、さらに日清戦争中の明治27年には火薬製造所が設置されている。この場所は下図に見るように、現在の陸上自衛隊補給処に火薬製造所、萬福寺の西南に火薬庫があり、方形の高土塁に囲まれた火薬庫建物が幾棟も見

て取れる。調査地は直接的に火薬庫建物部分に相当せず単に用地内ではあるものの、現在も山側には当時の試射場跡、北側には火薬運搬トロッキトンネルなどが残り、当時は用地内一帯に様々な関係施設が配置されていたことが理解される。また、「陸軍省用地」あるいは「陸軍省所轄地」の石柱は、現在も各所に残されており、その多くは土地境界標として現用されている。

今回の調査において採集した品は、戦後の火薬庫の廃絶に際して、当該調査地部分に投棄されたものの一部であろう。



fig18. 大正から昭和初期の火薬製造所と弾薬庫（宇治市史4巻より）

# 抄 録

ふりがな	いちばんわりいせきへいせい13ねんどはくつちょうさがいほう							
書名	一番割遺跡平成13年度発掘調査概報							
副書名	黄檗山手線建設工事に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報							
シリーズ番号	第54集							
編著者名	杉本 宏							
編集機関	宇治市歴史資料館							
所在地	〒611-0023 京都府宇治市折居台1-1							
発行年月日	2002年3月31日							
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	期間	面積	原因
一番割遺跡	五ヶ庄二番割	26204	10	34° 54' 22"	135° 48' 42"	011115 ~ 011227	100 m <sup>2</sup>	道路建設
収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
一番割遺跡	散布地	近世・近代		火縄銃部品・レンガ・石柱				

(宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第54集)

一番割遺跡平成13年度発掘調査概報

— 黄檗山手線建設工事に伴う発掘調査 —

発行日	平成14年3月31日
発行者	宇治市教育委員会
編集	宇治市歴史資料館
	〒611-0023 宇治市折居台1-1
印刷	新進堂印刷所